

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

號二二三三第・日二月八輯編局報情

大藏内閣圖書印



週報 眞實

時の立札
國民大和一致
その全力を國家奉仕に發揮せん

小磯・米内協力内閣発足す



- 初閣議を経て (1)米内海軍大臣、(2)小磯内閣総理大臣、(3)山田陸軍大臣、(4)山本海軍大臣、(5)高橋逓信大臣、(6)廣田農林大臣、(7)尾崎文部大臣、(8)榎本司法大臣、(9)三木文相大臣、(10)廣瀬厚生大臣、(11)林逓信大臣、(12)重光外務大臣兼大東亞大臣、(13)前田逓信大臣、(14)大津内務大臣、(15)有澤大蔵大臣、(16)三浦逓信局長兼内閣書記官長

大命を拜して

内閣総理大臣 小磯 國昭

今回閣下も盟友米内海軍大將と共に御召しに浴し、重大時局下、組閣の大命を拜しましたことは、洵に恐懼感激に堪へませぬ。

ひたすら、大御稜威に頼り、國民大和一致の協力を得て、一身を總局の突破に献け、あくまでも大東亞戦争完勝のため臣節の限りを盡し、以て微塵を安んじ奉らんことを期するのみであります。

聖戦の進捗については既に大詔に昭かにせられ、朝野挙々皆かざるところであり、また國民努力の目標は開戦以来、しばしの機会に聲明せられたところでありまして、今更これに繰返す必要がありません。たゞ不肖をしてこの際一言を費さしむるものありとすれば、それは現下の國難に臨む我々國民の信念と、これを行ふ實踐力の上に、今一段の徹底を必要とする点であります。

即ち、大東亞戦争においては支那事變の後を受け、崇高なる國體の本義に基づく國民傳統の道義條條に顕著なる進境を示し、それが外、赫々たる戦果となり、内、幾多敵兵を戦力の増強となつて今日に及んだのでありますが、しかしながら心を凝らし、國內態勢の諸相を省みるとき、國民的固有道義の自覺と發揚とに於いて今一步の潛心工夫を要するものあるを看取いたすのであります。蓋しこれ一億同胞が遠く萬國の由來に鑑み、國體の本義に透徹し、我々臣子として何をなすべきかの命題を個々の心境の上に開明し、しかして敢然各自の本分に挺身することによつて、豁然たる新境地を開闢し、直前發進して一氣に勝を制すべき端緒を把握するに至るべきを確信いたすのであります。

現下吾人の直面する戦局の起伏は、これ皇國の臣をして世界人類のために前途大いになすところあらしめんとしての神意に出づる試練のはかならずと解するのでありまして、一億のすべてが固有傳統の國民道義に徹し、必勝の信念を以て戦ひ抜くことのみが、この試練に打ち克つて國家の美譽を保全する唯一の道なのであります。

不肖小磯菲薄を顧みず、この見地に立ち、國民諸君と共に内、大いに道義を昂揚して協力戦力の増強を策し、外、盟邦との連繫をますます緊密にして、戦争目的の達成に邁進せんことを期するものであります。

國民諸君の現戦局に対する決然たる發憤が、必ずや鐵の脚絆となつて、政府の決戦方策に一層の協力を拂はるべきことを信じて疑ひませぬ。

(昭和十九年七月二十三日發)

大東亞戦争以来、政府は大本營と緊密一體の下、戦争遂行上あらゆる努力を重ね来りしが、現下非常の決戦期に際し、いよく人心を一新し、強固に戦ひ遂げるの意志なるを醸成し、廣く人材を求めて内閣を強化せんことを期し、百方手段を盡し、これが實現に努めたるも、遂にその目的を達成するに至らず、茲において政府は愈々人心を一心し、學國戦争完遂に邁進するためには内閣の刷新を行ふを適當なりと認め、東條内閣総理大臣は、閣員の新表を取組め、十八日十二時四十分、拜辭を仰せつけられたる上これを閣下に揮き送り

決戦下、専断に五れるは、士氣を損じ奉り恐懼に堪へず。また前閣員後において必勝に邁進を期しつゝある一億國民諸君に對し、政府の微力を盡すと共に、戦争完遂のため盡く

さすに強力なる内閣の出現を期待してやまず、かくて二十日小磯陸軍大將、米内海軍大將はそれく宮中よりのお召しにより参内、兩者協力して内閣を組織すべしとの大命は降下した。よつて直ちに組閣に着手し、兩大將は二十二日午後一時半宮中に参内、天皇陛下に拜頭仰せつけられ、讀んで閣員名簿を捧呈し、引續き同日午後現任式を執り行はれ、こゝに新内閣は力強く誕生したのである。

新内閣閣員	
内閣総理大臣	小磯 國昭
外務大臣	重光 葵
大東亞大臣	重光 葵
内務大臣	大津 清
大蔵大臣	有澤 廣
陸軍大臣	山本 武揚
海軍大臣	米内 光政
逓信大臣	山本 武揚
司法大臣	榎本 實
文部大臣	尾崎 士郎
厚生大臣	廣瀬 清
農商大臣	島田 健
軍需大臣	藤原 銀次郎
逓信大臣	前田 清
國務大臣	町田 忠治
國務大臣	兒玉 秀雄
情報局長	竹 虎

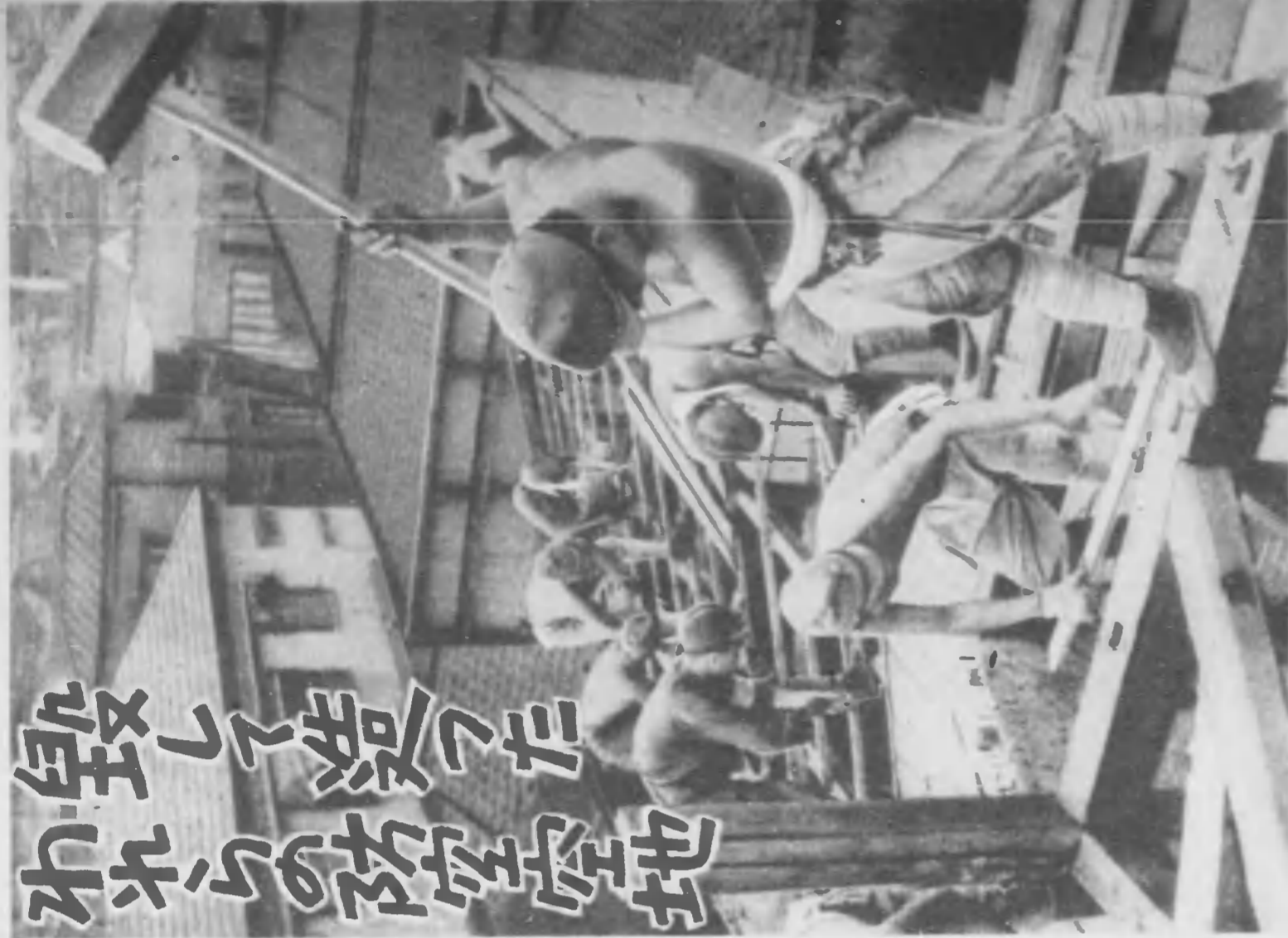


サイパン戦局の終結後、マリアナ群島を中心とする敵の中部太平洋攻撃は當然豫想されるものであつたが、敵は七月二十一日大宮島に上陸を開始し、同方面の戦局は急遽に重大化した。

大本營は昭和十九年七月二十三日、七月二十一日初四日内外の敵は大宮島、南島及び諸島の戦局に上陸を開始し、所在の我が艦隊は之を監視中なり。

かつてのグアム島である同島は、開戦前から太平洋戦路の要衝として知られ、敵は必死になつて同島の強化に狂奔してゐたが、開戦と同時にわが方に占領せられた。その後同島の奪回を夢見てきた敵は、今や有力艦隊の砲撃を頼みに同島に侵入して来たのである。

同島はわが本土及び比島から二千三百キロ、パラオ東北方二千八百八十キロ、トラックの西北方四千四百キロの地帯にあり、こゝにさらに海空基地を獲得せんとする新作戦に敵は、物量傾けつゝしてゐる。戦局の重大なることは、斯くて言ふまでもない。將兵の武運を無難し、一億の犠牲で死力をつくして前線の勇戦に臨むのみである。



壊して造った 不壊の防空空地

□ とりこはしな鳥の木材で、疎開して来るヨイコノ學校を建て、石鳥の名案が五反田町で実行された。二十日間に五種の機動隊千五分の木材を供給した地元の浪井青年隊の機動とそとの人々の見守り

帝都の建物疎開完了

□ 警防員や防衛員が除却された空家の窓や壁などを取り、厚板、防弾板がまたくうちに公共待避所の構設としてゆく、微塵ましくも頼む所の協力あり



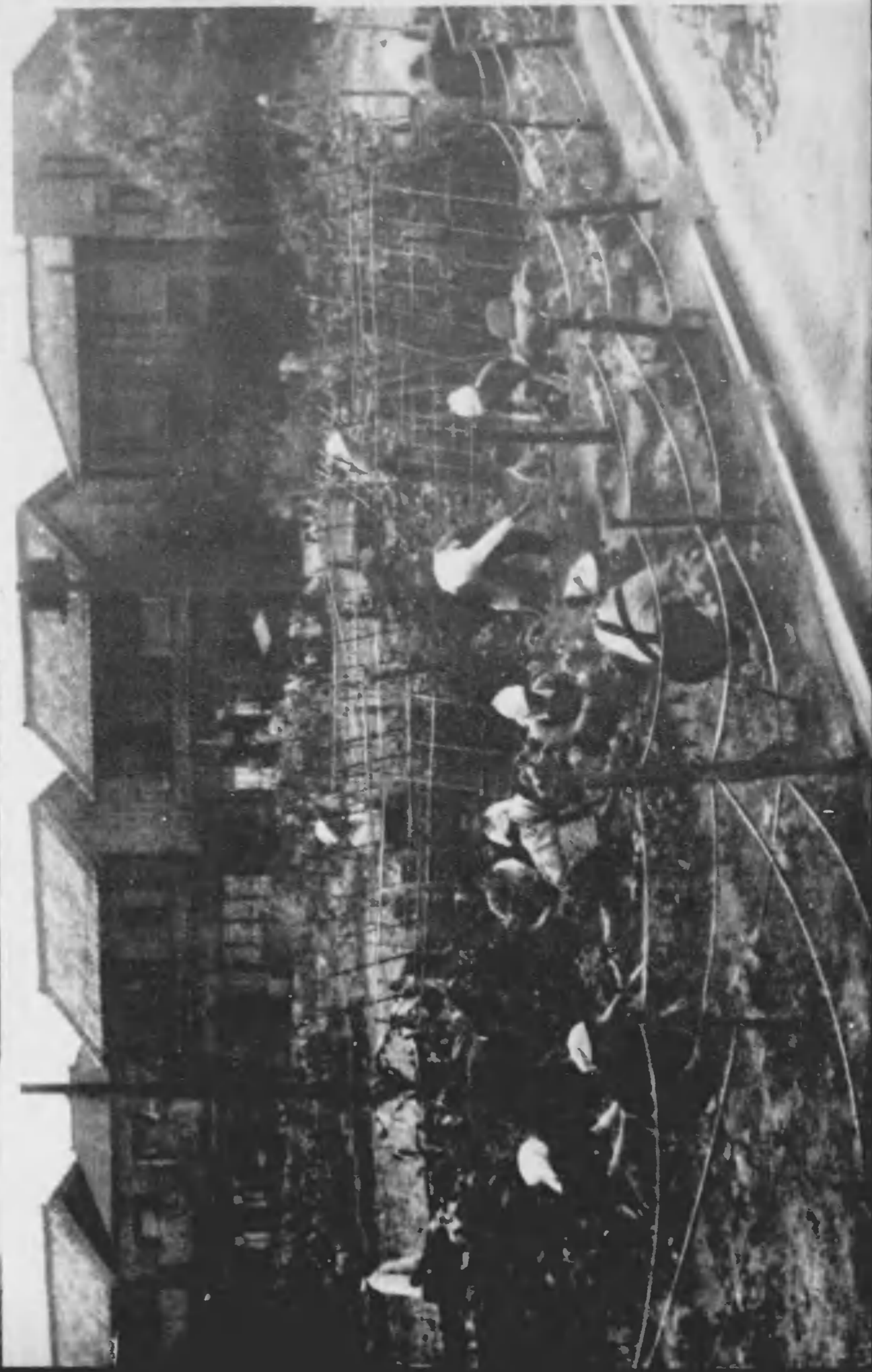
□ 窓がとりこわれれば、水は木材の後始末。エフサ、エフサと、天下も物かは、木材を運んでゆくのは、上谷町会長の主幹者、からし汗の努力が疎開前に疎開を終へ、完全な防空壁を築き上げたのだ

□ 『変へはしつかり感はない』—「木材といつてもまろく、大木なもの。急いで逃つて敵機に焼くよう疎開が国民の戦國耐置なら、俺のある防空壁とを国民の陣地だ—神田区にて



帝都の建物疎開は昨年十二月の第二次指定から始められた。當時敵アメリカは「あんなにたてこんだ東京がさう簡単にできるものか。で、たれぞ目にかゝる」と冷笑したものであつた。敵前疎開のためわが家から名残りを惜しむつゝ、敢てといでたつ強制疎開者。その上による隣組、町会の人々の戦友愛があり、さらに建物の除却に當つては隣組はもちろんで、一日二万三千名による隊徒、或ひはまた軍隊も出動して協力するなど、正に「敵前疎開」の真意込みのものづく、十五ヶ所の建物疎開が全部指定の七月末日前には見事に終了した。しかも除却された木材はそれづくお役に立てられてゐる。まづ、住宅に使えるものは産業戦士や強制疎開者が住む家を建てるのに廻はされるほか、建物に使へない木材は二重疎開者の荷造りにされたり、敵の空襲に備へて、数倍に増設された公共待避所の構設に活用された。これこそが敵の冷笑に叩きつけた八百万都民の戦果なのだ。

□ 写真は提供(五反田)朝日新聞社 毎日新聞社
目白をしのび七十五世帯の家がたてこんでくれたのは昔の夢。カマと日當りのよくなつた本所風車川橋五十一の疎開空地は、隣組園と知り、トマト、かぼちがすくくと育ち、明るい戦果を誇る



うら造を船

高橋 週報

書を見よ。この海の彼方に南の島々がある。忠忠の將兵と列島の同胞の血潮に染めたサイパン島がある

その無数の島々を敵は尙も既々として狙ふ。米鬼來れと待ち構へる我が將兵へ盡し得る道はたゞ一つ

補給。飛行機、武器、弾薬の絶えなき補給である。これが無敵の卓攻を敢強たらしめる唯一の道である。また交源地帯より豊富な原料を選び、戦力を新へて敵を撃倒し得る最上の道である

船だ——船のほかはない

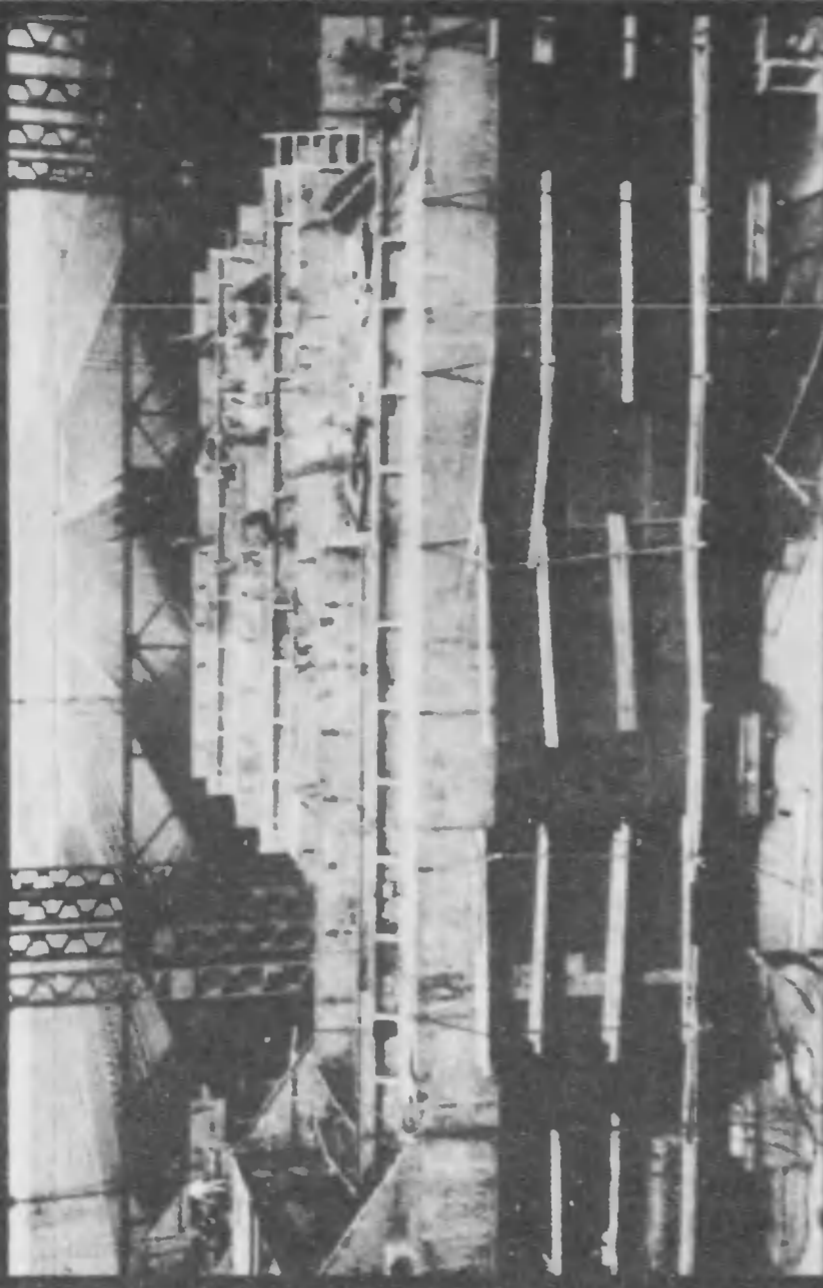
今や日本の運船界はサイパンの終りをそのまゝ夜を日に繼いで全能力をあげてゐる

見よ、進水場上を滑り行くその雄姿を

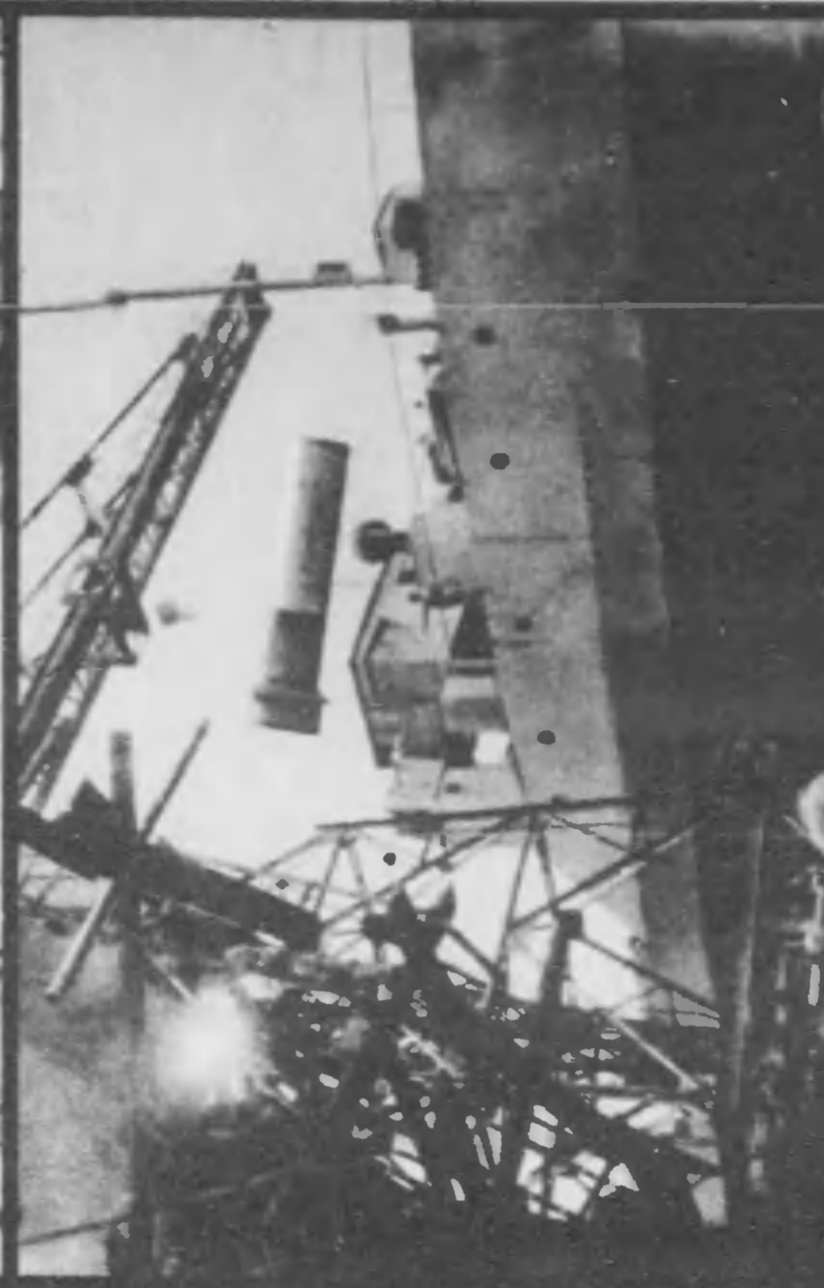
聴け、騒鬧にも似た豪快な水音を

次ぎ／＼に産み出される標準船の大群は、やがて南の海面を塞々と埋めて、勝利の補給を續けるであらう

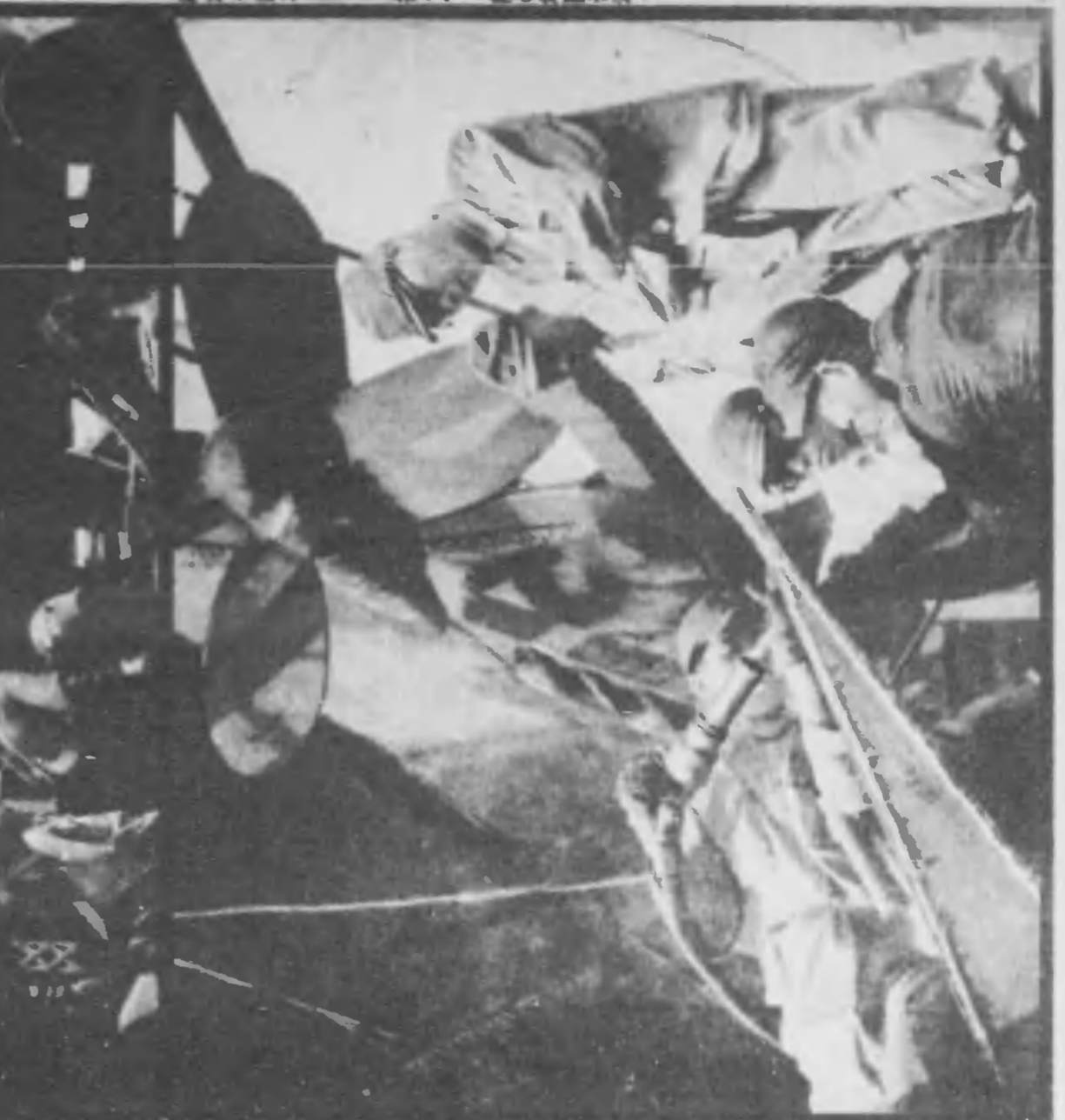
八分通り出来あがつた船體の一部



外部補給のつり上げ作業

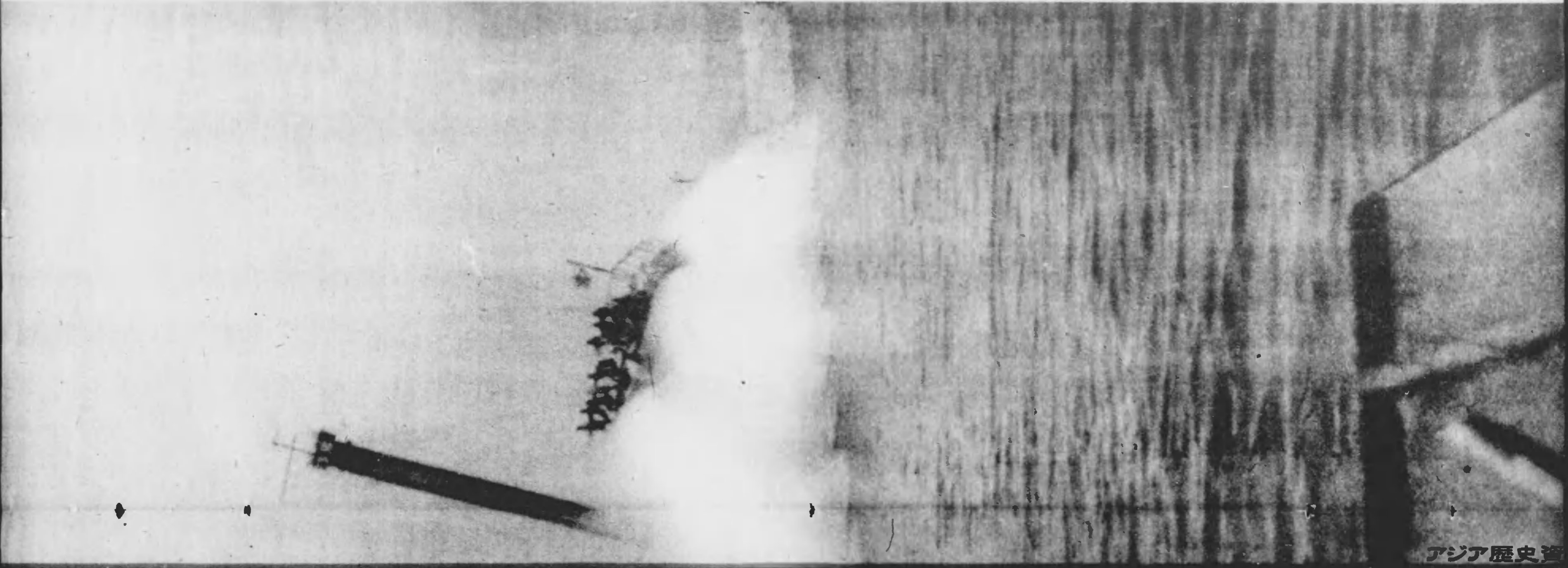


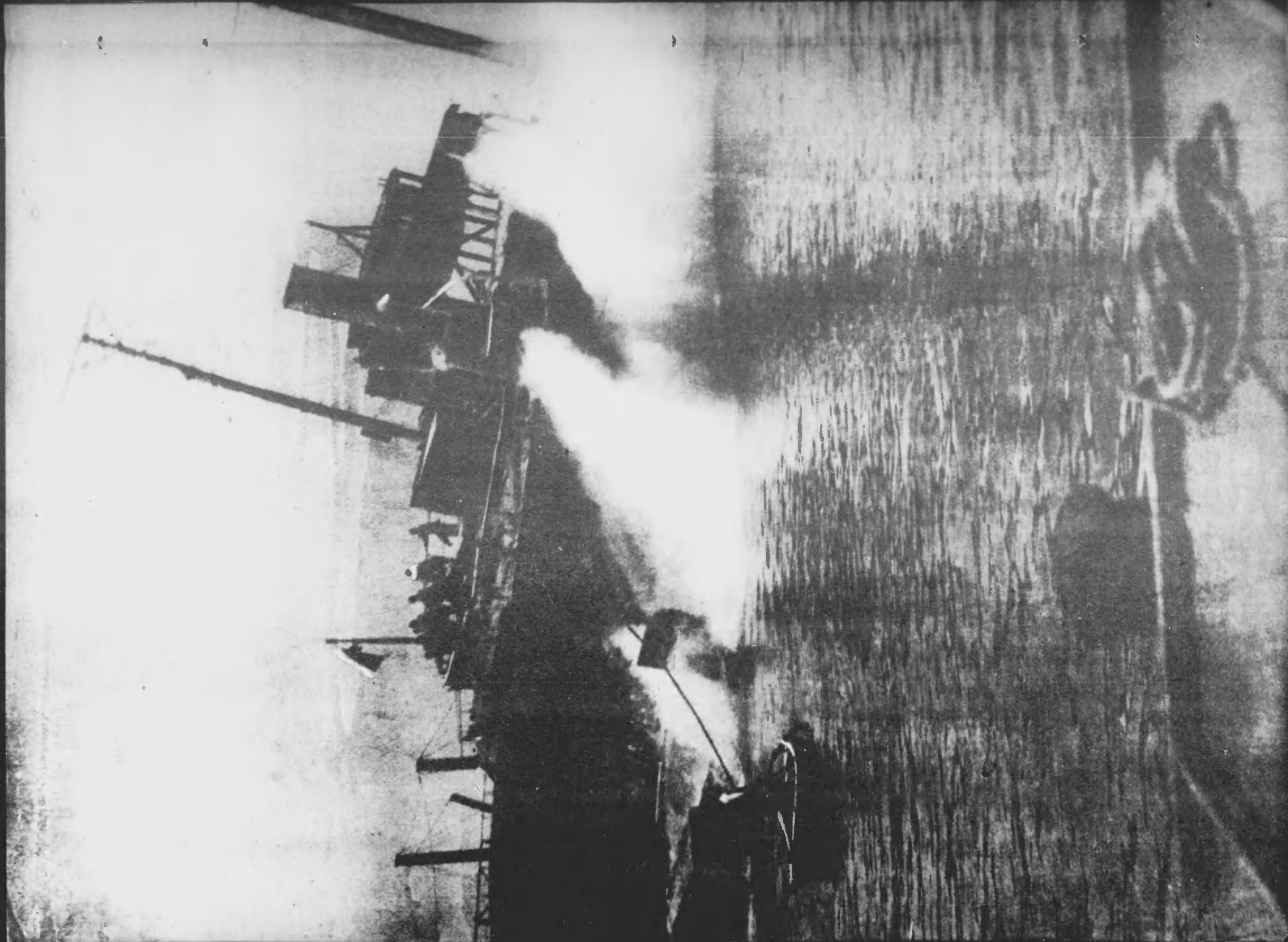
砲孔の傷木を明日に控へて、砲の準備を急ぐ

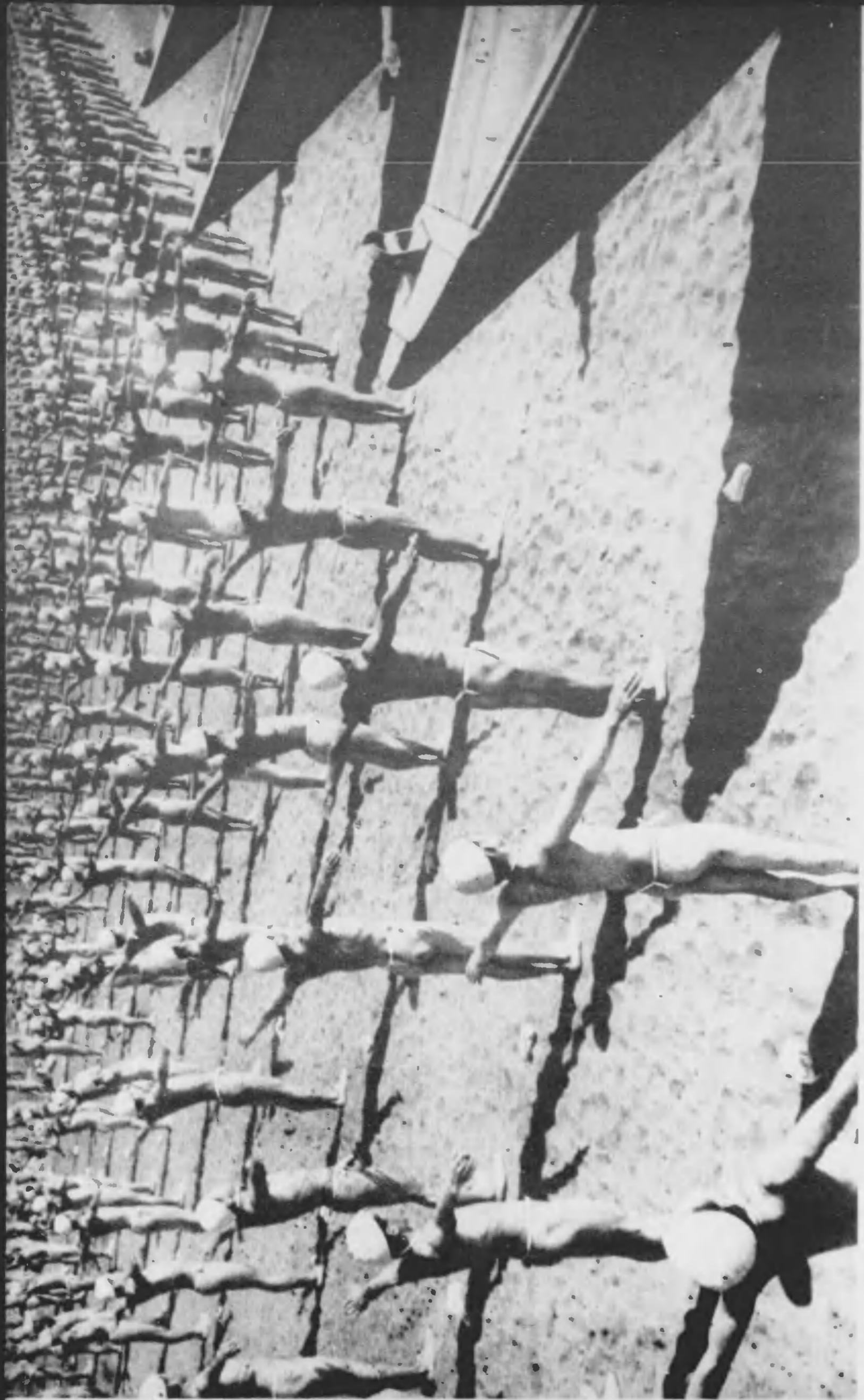


◁ 網は切られた。また一船、飛沫をあげて滑り込む。船首の日の丸も鮮やかに、産屋高く法眼の海に乗り出してゆく勇壯な標準式進水

— 國海軍省公報局提供 —







僕らは海員だ

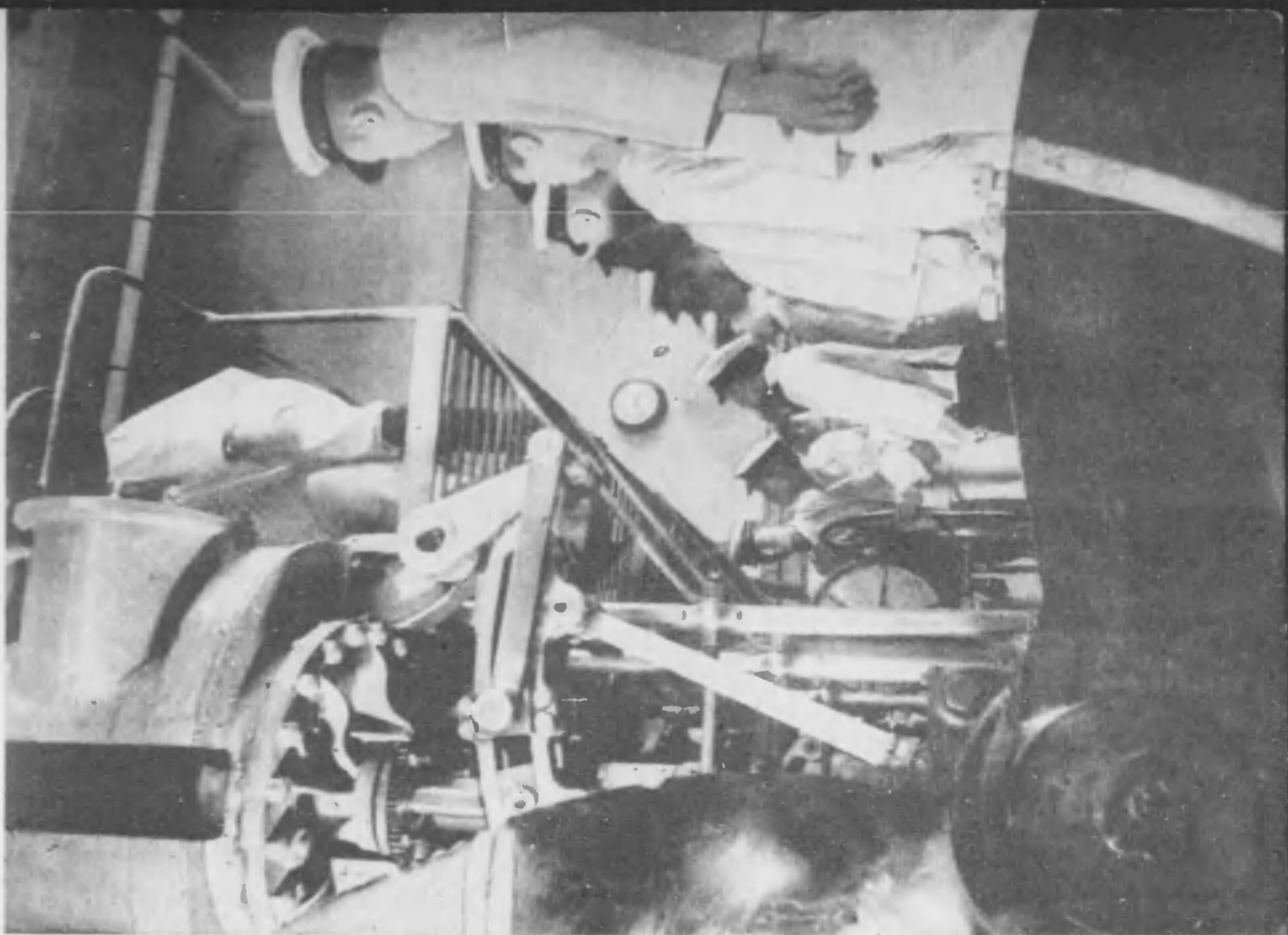
官士船商の練訓 勇猛

難しき船と海員の數
 が、やがて輝かしい勝
 利をもたらすであらう
 若人の血は躍動する。
 海へ、海員へ、滅敵
 の陣地を選しいふ體に
 こめて、艦士擧方の若
 者は海への希望を高
 ります。

此、三保の
 練水高等商船學校では
 これら明日の海員の姿
 成にいとまない。現在
 は主として下級生のみ
 を收容し、三年生は東
 京及び神戸の商船會で
 練習を續けてゐる。

大東海員養成の想
 から、かつては五年を
 要した課程も、現在で
 は僅か三年に短縮せら
 れ、その上一年の短期
 訓練生もある。生徒た
 ちにとっては大きな負
 担であるが、海軍の前
 に不可能はない。年
 が半分になれば倍の、
 三分の一になれば三倍
 の努力をもつて、立派
 に先輩の間に伍してゆ
 かうと、毎日、血の滲
 むやうな練習を續けて
 ゐる。

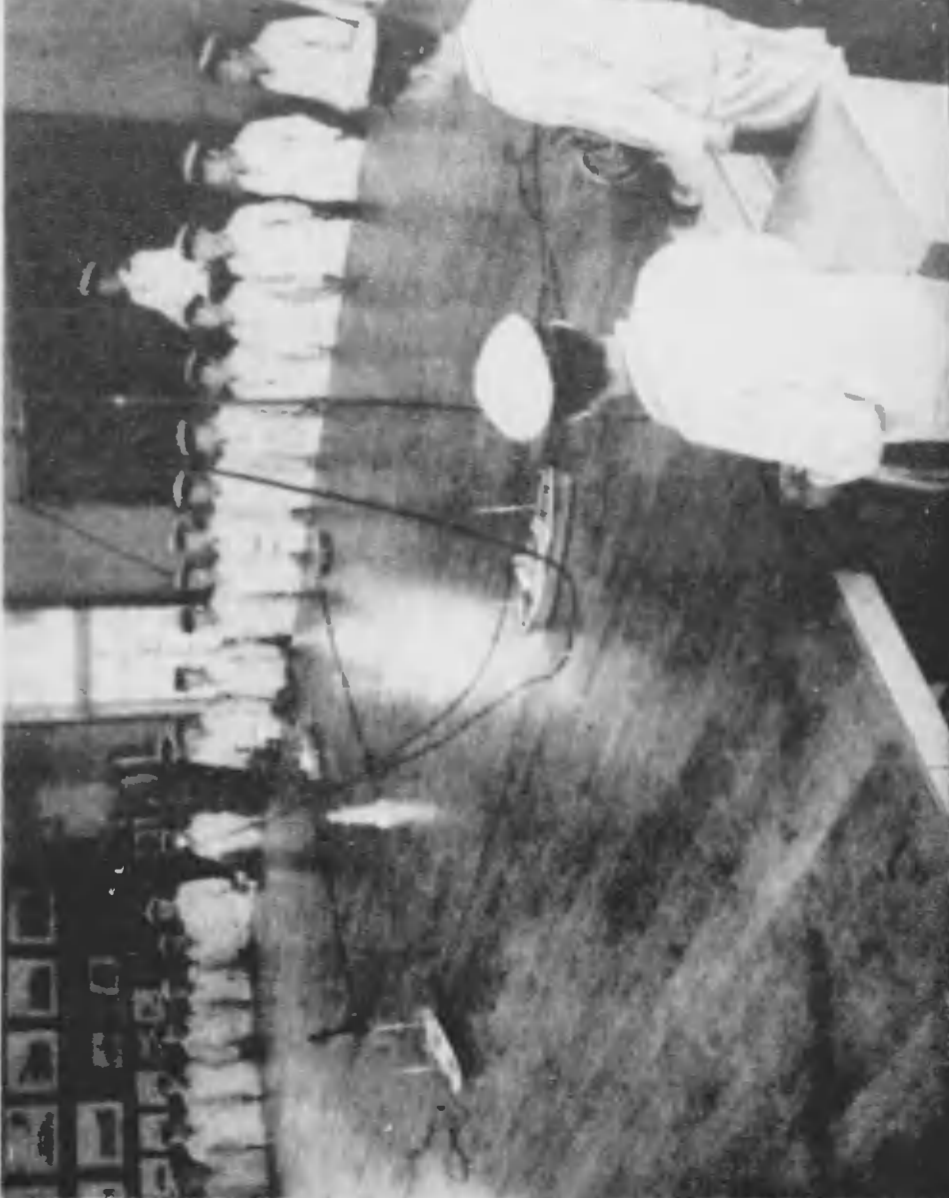
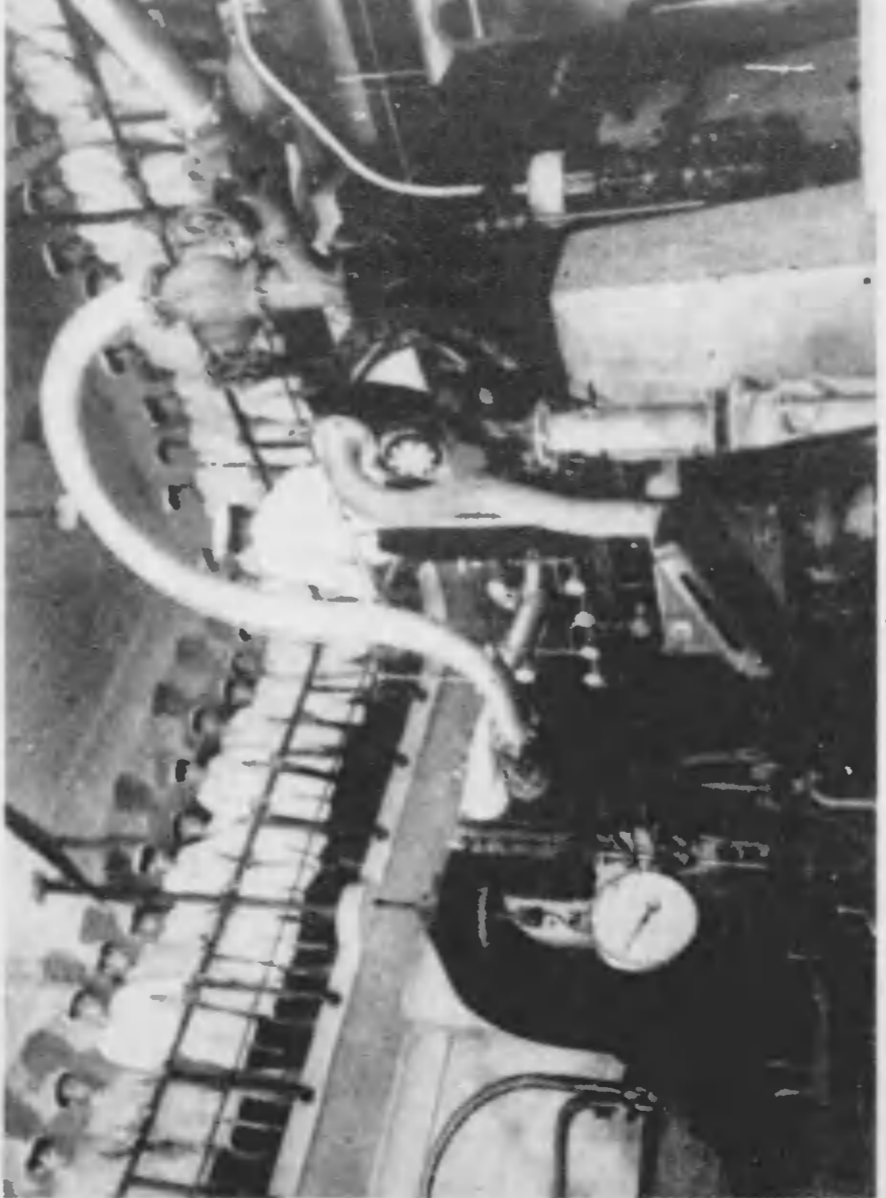
艦士を叩きつゝ、
 美しい三保に日夜
 鍛へる海若人



機油を吸下せろとトルネメント
 熱気蒸気の運轉練習

此、では汽船の構造説明を、組立
 練習をさせる

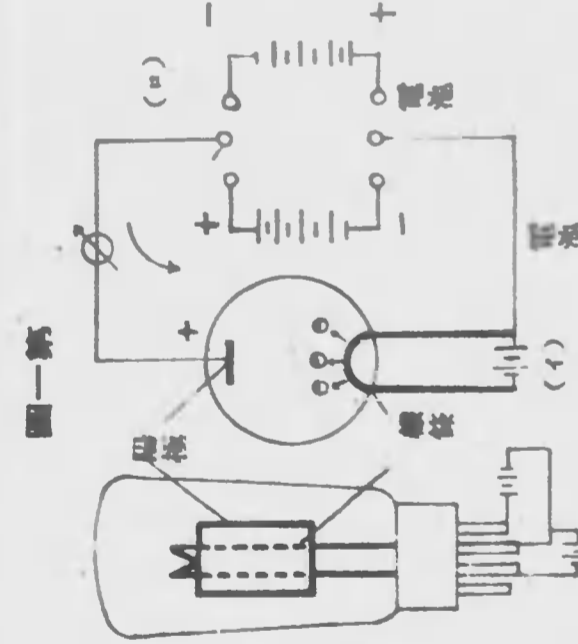
船舶の衝突事故防止のため、電氣機器の
 模型汽船によつて預防法の練習をさせる



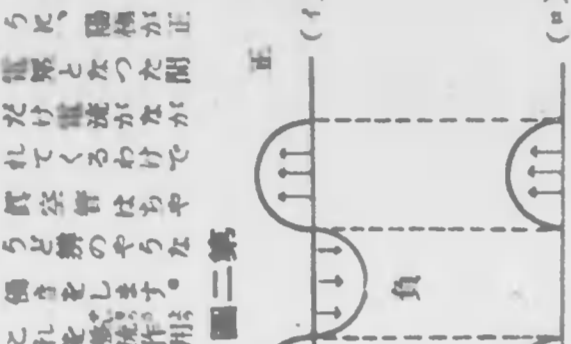
真空管を大切にしましょう

真空管は電波、電波兵器、ラジオ、すべて真空管の集まりです。電波兵器には必ず真空管がついて廻っています。電波兵器として地上部隊と飛行機との連絡に、地上部隊と艦隊との連絡に、飛行機の位置や距離を測る精密機に、また機つたところでは水中通信に、いちく収束し、いどまがないほどです。

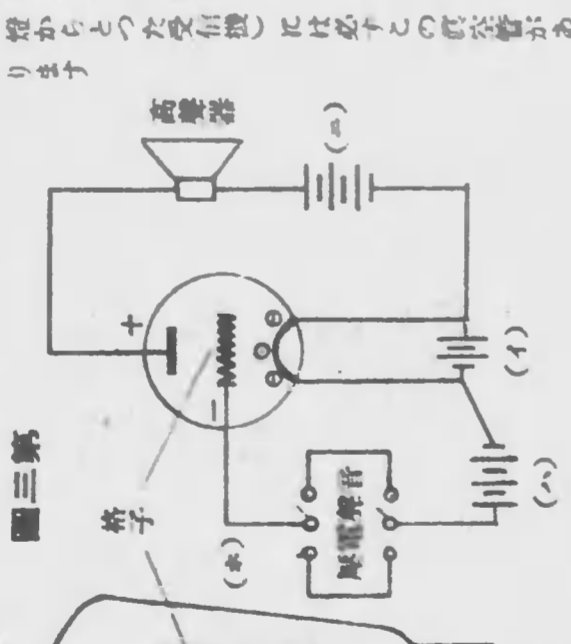
二極真空管とは、第一図に示すやうに格子の中を電子が、これと対向して金属板(陽極)とを射入し、球内の空気を抜いて真空にしたもので



いま電池(イ)で電圧を熱すると、水を熱したときに水蒸気が出るやうに、陰極の表面から負の性質を帯びた電子(電気の原子)がとび出す。このとき電圧(ロ)が左に倒してあると、陰極は帯電してゐるので、陰極からとび出した電子は陰極に引く原理で、陰極側にひきつけられます。電流の方向は電子の方向とは反対ですから、矢印の方向に電流が流れます。次ぎに電圧を右に倒すと、陰極は陰となつて電子は反撥され、陰極に接することができません。従つて電流は流れません。電池の電圧を左右に切替へるかは、第一図(イ)のやうに、極性が逆な電圧を流す(ロ)に示すやうに、電圧を

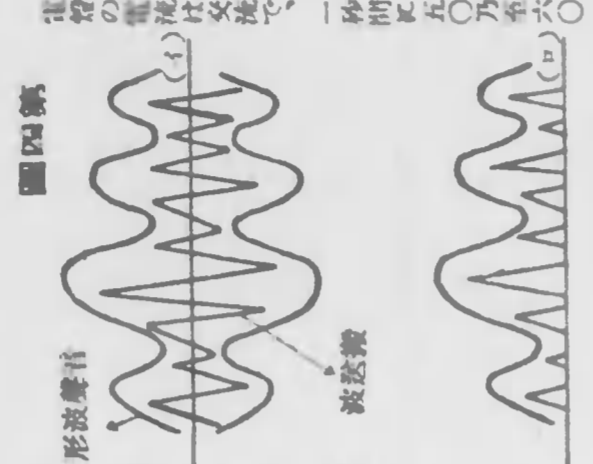


り、陰極が正電圧となつた間だけ電流がながれてくるわけであらう。このやうな働きをします。これを整流作用と呼び、交流電圧を直流電圧に変へる役目をするもので、一般電燈の交流式受電機(電圧を電燈からとつた受信機)には必ずこの真空管が



二極真空管といふのは、第一図に示すやうに二極真空管にさらに網状の格子といふ一種を挿入したもので、格子(ハ)の電池で帯びた電子は帯電させておくと、陰極からとび出した電子はこの負性の場所を制約をうけて、陽極に達する量が変化します。つまり格子の負性の強弱によつて電流電圧が増減されます。そこで電圧(ホ)を左に倒し、音響電圧を減ねると、格子の負性の場合が音響電圧の強弱によつて変化しますから、電流電圧は加へられた音響電圧と同じやう

に變化し、しかも格子側の電圧の變化が陽極側では電圧の十倍も大きな變化となりま



電圧の電流は交流で、一秒間に五〇乃至六〇回方向を變化する一種の振動電流で、この振動回数を周波数といひ、単位をサイクルといひま

す。音響電流はやはり振動電流で、二五乃至一〇〇〇〇サイクル位の範囲ですが、ラジオの電波の原因波は、驚くやうな数億回サイクルで、これは第一図(イ)の如く音波の形で變化した波です。このやうに電波の周波数を高くするのには、放送局の空中線から放射されたものが空中をよく傳はつてゆくやうにするためです。さてこのやうに周波数が高く、また上下對稱となつた電流は、いかによくてもそのまゝでは十分に高周波を受信機を動かして管とすることはできません。そこで受信機の中に入つて來た電流による電流は(ロ)に示すやうに、半分だけ切りとつた形に變へて音響に相當する電流を抽出しなければなりません。この作用もまた真空管によれば幾んどでき、これを増幅作用といふ

のです。格子を持つた真空管を使ふと、増幅作用も併つて感度がよいのです。このほか、真空管は増幅作用なども行はせることができます。以上は極めて簡単な真空管の基本動作ですが、今日使はれてゐる受信真空管は、格子の数が二つも三つもあつて、巧妙な動作をするやうに工夫されてゐます。

こゝで放送局の受信機に今まで述べた作用をあてはめると、空中線でとらへたラジオの電流は第一球で一度増幅し、第二球で檢波増大し、この音響電流を第三球で増幅して高周波を動かせるやうになつてをり、別に整流管があつて、これらの真空管に直流電圧を供給するしくみやなつてゐるので

真空管は大切な兵器です。従つて真空管を長持ちさせることは戦力の増強なのです。真空管はとかく粗末に取扱はれがちですが、左のやうな點に注意して下さい。

- 一、やたらに電圧を加へないこと、また電圧は電

しておくこと

二、ラジオを動かさないときは必ずプラグを抜いて真空管の電圧を下げること

三、また真空管を左右に動かしたり、曲げたりしないこと

真空管は取扱が悪いと、格子の部分が外れて使用できなくなります。これを防ぐためには真空管を抜き出すときは、必ず真空管のベースの部分(格子でないところ)をもつて、靜かに引ぶることが大切です。格子の部分を持つて抜き出すと、格子部分とベースが外れてしまふ虞れがあります。

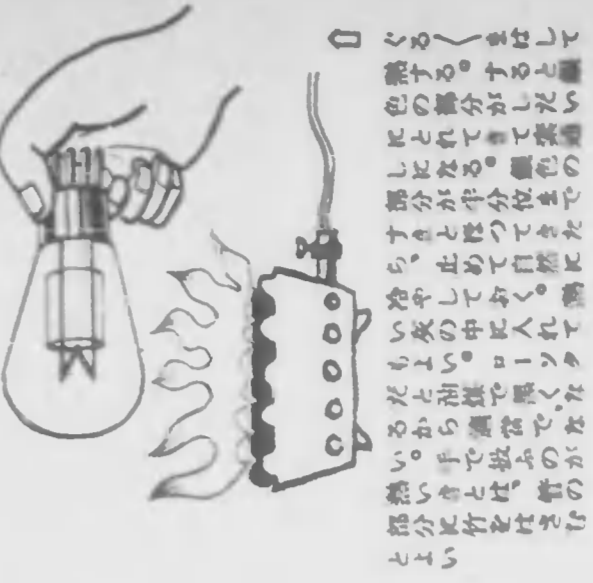
使用中にこの部分がだらだらになつたものは電氣用のブラクテニアを巻くか、またはマンガイン等の糊で固めます。新しい真空管も同じやうに取扱ひ、もし外側に入つてゐるものは必ず裏から取出して押し込み、熱の取扱をよ

真空管の故障

真空管の故障は線維の断線とか、電極短絡、感度低下、熱線不良、雑音等です。また、受信機中に線維が滑りたりするやうな真空管は、脚の接觸が不完全なのですから、よく接觸するやうに直すこと。また、B.A.には脚と着付けたら真空管で感度の低下したものは、並のやうにすれば、回復できるものやよくなるものも多く、相當長い間隔で復するのです。これにはまづ炭火、ガス、電熱などで格子の部分や平均に熱すると、銀色の部分が(全部でなくともよい)消えて透き通つて來ます。そこで自然にさまして、受信機に入れ電氣を通すと、最初内部に青い光がたり、線維がきこえたりしますが、そのうちによく聞えるやうになります。

真空管を買ふときは悪い不良真空管と交換す

第一圖一 真空管はよく生産される。検査に妥當でない女子は身



ることになつてゐます。どうしてかと申しますと、真空管には、わが國に産出の少ないニッケル、モリブデン、タングステンなどの合金が使はれてゐるので、これらの原料は回収しな

らざるに限り、いちばん足りないのは真空管です。現代戦におけるラジオの軍用性に鑑みて、日本放送協會では、できるだけラジオ用の真空管を確保しようと努力してゐますが、生産がぐんと上つてゐても、兵器として使はれる真空管が非常に多くなつてゐるので、とかく思ふに任せません。しかし電氣機械統制會、ラジオ受信機製造株式會社と協力して、真空管の確保状況に關し、聴取者から申込みを待つて真空管の購入切符を配付し、必要な向うへの真空管確保に協力努力してゐます。

必要の方は不良真空管の増産と調製用者、住所姓名を書いて放送局に申込めば、購入切符をもらへることになつてゐます。その切符と不良真空管を持つて指定のラジオ部には購入できるわけ

加里肥料

植物の成育には必ずつたに必要なのは、みなさんご存じです。とくに加里は肥料以外の化

このやうに大切な加里は、今まで世界最大の加里産地を有する盟邦ドイツから主として輸入してゐましたが、開戦以來わが國は國內と共

からいろいろの方法で加里を採つた後の苦汁からいろいろの方法で加里がとられます。また、カシメ、ホンダラなどの海藻類を焼いた灰から加里が採れますし、木灰なども有力な加里肥料です。しかし、いづれもまだ今日の需要をみたすにはとても足りません。



原産からどうして加里分をとるか、例へば伊豆の下田附近から採れる加里石(重晶石)といふ礦石は、九十%の加里分を含んでゐますが、硫酸やアルミナ等と結合してゐるに溶けないやうな状態であるため、これを焼いたり、薬品で処理したりして、水に溶けるやうにすることが必要です。

そこでこの礦石を粉末にして、これに加里分を溶かし出す作用をする硫酸石灰とか塩化石灰を加へ、また反応をしやすいするために、石灰石、炭石等を配合し、これらの混つたものを約千度で千度一千二百度の高温に熱すると、硫酸石灰または塩化石灰が礦石中の加里と作用して、加里が硫酸加里または塩化加里の形に變化し、水に溶ける状態となり、これを取り出せばよいのです。またこのやうに加里が水に溶ける状態になつた混合物に水を加へ、さらに炭酸アンモンを加へて反応させると、加里と一結合アンモン、つまり、肥料分の混つた肥料ができるのです。

石膏やまた加里石、明礬石などの礦石も、何んと同じ工程で水にとける形に變化させ、肥料として用ひてゐるので

